

小学校社会科第6学年単元「世界の中の日本」授業モデルの開発 －開発教育(development education)の教材を活用して－

教育実践高度化専攻
小学校教員養成特別コース
M07339F
前田 潤一

1 研究の動機と目的

筆者は教育実習や実地研究などを通じて小学校第6学年を中心に関わってきており、その中で社会科の授業づくりに関心を寄せるようになってきている。

これまで社会科に関する理論書や実践報告書では、社会科授業の一般的な課題に対して有効と考えられる授業構想や授業方法が報告されている。しかし、学校現場における授業実践には大きな進展がみられないことを筆者は実感したのである。

筆者が実感した課題の一つは、授業者が教科書や資料集のテキスト情報に説明を加え、黒板にまとめたものを学習者がノートに書き取っていくという講義形式に対してである。講義形式の学習形態では学習者の主体的な問題追究する力を培うことができない。また別の課題は、調べたことを発表するにとどまり、得られた情報の関係性をとらえ、吟味する活動が行われていないことに対してである。報告や紹介にとどまる学習活動では、授業者と学習者や学習者同士が意見を闘わせながら協力して観点の精査を行い、問題を追究していく楽しさなどを、学習者に実感させることができない。

こういった課題の解決方法として、ワークショップ形式の学習活動を取り入れることを考える。

ワークショップを行う際には、その活動をどんな目的で、どんな内容を、どんな方法でという視点が重要である。そこで開発教育(Development Education)の教材を扱うこ

とにする。

開発教育では五つの学習テーマを設定しており、それは①多様性の尊重②開発問題の現状と原因③地球的諸課題の関連性④世界と私たちのつながり⑤私たちのとりくみである。またその教材には、グループワークを中心にして、他者との対話を促し、情報間の関係性を検討する活動が組み込まれている。

このように開発教育の教材は社会科授業の一般的な課題を克服し、しかも情報間の関係性を検討する活動を展開できると考えられる。

また、筆者は自身の青年海外協力隊の経験を教材化していくことを希求している。そこで、小学校社会科第6学年の単元「世界の中の日本」を取り上げる。本単元では青年海外協力隊の活動が取り上げられており、本研究を手がかりにして、自身の教材開発に活かしていこうという期待をこめている。

そして、本単元との学習内容の関連を考慮し、世界の現状を概観させるのに適し、世界の様々な問題や多様性をつかませることができる開発教育の教材である「新・ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら」(以下「100人村」と略記)を活用する。

以上のような動機から本研究の目的を、開発教育の教材「100人村」を活用した小学校社会科第6学年単元「世界の中の日本」の授業モデルを開発することとする。

2 研究対象と研究方法

① 開発教育の概要をとらえ、その教材内容を分析する。

② 小学校社会科第6学年単元「世界の中の日

表 小学校社会科第6学年単元「世界の中の日本」

	単元名	時数	内容
導入	世界の現状を知ろう。 ※本時	1	世界の貧困問題や多様性を地域別にとらえ、国際社会のあり方を考える。
展開	小単元「1 日本と関係の深い国々」	5	世界各国の文化や生活の多様性を知る。 日本とそれぞれの国とのつながり方をとらえる。
	小単元「2 世界の平和と日本の役割」		4
まとめ	国際社会のあり方を考えよう。	2	単元全体の学びを整理し、国際社会のあり方を再考する。

本」の授業実践を分析する。

- ③ 開発教育の教材「100 人村」を活用して、小学校社会科第 6 学年単元「世界の中の日本」の授業モデルを開発する。

3 研究報告書の構成

序章

第Ⅰ章 開発教育の概要とその教材

第Ⅱ章 小学校社会科第 6 学年単元「世界の中の日本」の指導計画と授業実践

第Ⅲ章 小学校社会科第 6 学年単元「世界の中の日本」授業モデルの開発

終章

4 研究報告書の概要

序章では、研究の目的と動機、研究対象と研究方法について述べている。

第Ⅰ章は、開発教育が 1960 年代に欧米諸国の NGO が海外援助広報・資金収集活動として始まり、日本では開発教育協会がその普及の中心となり、その教育内容が南北問題だけでなく、ジェンダー、人権など時代の変化に対応して幅広く、より具体的になってきたことを示している。近年では国際理解教育やグローバル教育、シチズンシップ教育、持続可能な開発のための教育などとの位置づけが明確にされておらず、開発教育が目指す方向を明らかにすべき岐路に立たされていることを指摘している。また、「100 人村」の分析を行い、課題として統計情報の更新と少

数データの埋没、発達段階との整合性、学校教育で扱う際の授業者の役割についての課題を挙げている。

第Ⅱ章では、実地研究における授業実践を分析し、「100 人村」が学習者の興味・関心を高めるのに有効であること、一般的な社会科授業の課題を克服できることを明らかにしている。

第Ⅲ章では、授業実践の振り返りを踏まえて、単元構成の組み換えと本時案に修正をしている。単元の流れは、上の表「小学校社会科第 6 学年単元「世界の中の日本」」で示している。「100 人村」を単元の導入において活用することにし、本時の授業モデルを示し、考察を加えている。

本論文の研究成果としては、第一に開発教育の視点を持って授業モデルを開発した点である。第二に学習活動によって、学習者が能動的な授業参加をうながすことができることを明らかにした点である。

5 今後の課題

- 本研究で開発した授業モデルの実践を行い、子どもの認識の変容がどの程度起こるのかを検証する。
- 「100 人村」以外の開発教育の教材の活用や併用、自身の青年海外協力隊経験の教材を開発し、授業モデルの開発を行う。

主任指導教員 關 浩和
指導教員 關 浩和